

『恋敵退散!!』

著:加納 邑

ill:こうじま奈月

講堂の壁のそばに一本だけ立っている木の下に、木製の小さな祠(ほこら)がある。
「あれって、祠……？ どうしてこんなところに……？」

近寄ってみると、上部が瓦屋根になっていて中になにか祀(まつ)られているらしいそれは、光がちょうど両手で抱えられそうな大きさだ。腰までの高さの石でできた台座の上に載っている。前面の格子扉は観音開きになっていて、その中央に古い御(お)札(ふだ)が封印のように貼られていた。

どことなく、祠全体がおどろおどろしい暗い空気に包まれている。

普段、靈感とかいったものもまったくなく、どちらかという『ニブイ』ほうに属する光だが、なぜか背筋にゾクッと寒気が走った。

「あ……なんか、変な感じ……」

冬の寒さとは明らかに種類の違う冷気に縛られたように、光はその場から動けなくなる。

「この講堂、かなり古そうだけど。この祠って、講堂が建てられる前に、もうここにあったのかな？ だから、他の建物は洋風なのにこれだけ和風……？」

ブツブツと独り言を口にしていた光は、突然、背後に気配を感じてハッとした。

「……そうじゃない」

突然の声に息を呑(の)んで振り返ると、すぐ後ろに男子生徒が一人立っていた。

肩幅の広い、しっかりとした身体つき。すらりとした彼は、身長が百八十センチを超えていそうだ。青鳳学園の制服を……見るからに上品なデザインのブレザーとズボンを身につけていて、それがまたよく似合っていた。

黒い前髪の向こうの、男らしい眉。通った鼻筋。精(せい)悍(かん)な頬に、温かな笑みが浮かんでいる。

ずいぶん大人びているが、制服を着ているから三年生だろうか。

自信に満ちた黒いその瞳が、彼をますます大人っぽく見せている。

男らしさに溢れた容姿なのに、表情や全身にどことなく知的で育ちのよい雰囲気(きふく)が滲(にじ)んでいる。まさに光が憧れていた、青鳳学園の生徒そのものといったイメージだ。子供っぽい自分とはまるで正反対の彼に、光は思わず見(み)惚(と)れてしまった。(うわー……すごくカッコイイ。さすが青鳳学園の生徒って、やっぱりちょっと、その辺の高校生とは違うなあ……)

光のそばまで歩いてきて並んだ彼が、講堂を見つめて言う。

「この講堂は確かに古くて、もうすぐ建てられて百年経つ。でも、こっちの祠は、今から四十九年前に造られたものだ。だから、講堂よりも古いわけじゃない」

声までが低く落ちていて、男らしさを感じさせる。

彼は光の全身をぶしつけにならない程度にゆっくりと眺め、それから、ふっと目を細めるようにして微笑んだ。

「君は受験生……？ もしかして、今日の外部入試の合格発表を見に来た……？」

「あ、は、はい、そうですっ」

光はパッと笑顔になって頷(うなず)く。

男子生徒が、クスッと笑い声を漏らした。

「その顔を見ると、結果はよかったみたいだな」

「は、はい……っ！」

「それはよかった」

微笑んだ彼の笑みがとても温かく感じられて、なんとなく安心できた。

光には年下の弟が一人いるだけで、兄も姉もいない。もし自分に兄がいるならこんな人がいいな、と思わせるものが彼にはあった。

(なんか、すごく頼りがいがありそうっていうか……なんでも相談できそう)

光はまたその生徒に見惚れて、ぼんやりと突っ立っていた。

「ああ、そうだ。四月からこの学園の生徒になるなら、一足先に教えておいてあげるよ」

男子生徒がそう言って、二人の前にある祠へと視線をやる。

「この祠には、造られた四十九年前から、幽霊が封印されているって言われているんだ。面白いだろう？」

「!!」

光は大きく息を呑んだ。

「ゆ、幽霊が……封印されて？」

「そう。四十九年前に亡くなった、この学校の生徒の幽霊がね」

男子生徒が真剣な顔をして頷いた。

「しかも、その幽霊は、四十九代目の生徒会長のときにこの祠の封印を解いて、もう一度この世に復活するって言伝えられている。四十九代目の生徒会長が、その幽霊に呪われることになる、って言われているんだ」

あまりにも突拍子(とつぴょうし)もない話だと思ったが、つつい訊いてしまう。

「生徒会長が、の……呪われるって、具体的に……どんなふうにな？」

「幽霊に呪われて、悲惨な死に方をするって言われている」

男子生徒はさらりと言った。

「……っ!!」

「まあ、単なる伝説っていうか言い伝えっていうか、そういうものだけど。でも、幼稚舎から持ち上がりの連中はけっこう気にしているみたいでね。なにしろ、皆、小さい頃からずっと、高等部のその言い伝えを耳にしていたから……」

うんうんと頷きながら言う男子生徒の隣で、光も祠の方へ恐る恐る視線をやった。

先ほど、まったく靈感のない自分が感じた寒気のようなもの。今も祠がなんとなく不気味に思えるのも、その幽霊のせいなのか。そう思うと、背中に冷や汗がじわりと滲む。

(ゆ、幽霊なんて、死ぬほど怖い~~~~~っ！)

幼い頃から、光はその手のものが大の苦手だ。

話をするだけでもダメで、友人たちが怪談話を始めたときなどは、なるべく早くその場を離れて耳に入らないようにする。そうしないと、それから一ヶ月は……いや、下手をすると何年も、その怖い話を繰り返し思い出し、夜中にトイレにも行けなくなるのだ。

光が真っ青になり膝(ひざ)を震わせているのに気づいてか、横にいる男子生徒が問

いかけてくる。

「どう？ こんな話を聞いたら、もうこの学校に来る気がなくなった？」

自分の怖がりの性格を見透かされた気がして、つい、キッと睨(にら)むようにして言い返していた。

「ま、まさか！ そもそも、その幽霊に呪われるって言われているのって、四十九代目の生徒会長だけなんですよ？」

「ああ」

「だったら、僕は生徒会長になんてならないと思うし……幽霊とはなにも接点がないと思うから、平気です。それに、すごく頑張って受験勉強したし、この学園に通うのは小さい頃からの夢だったので……だから、ぜったいに入学しますっ！」

強い口調の光に、男子生徒はまた微笑んだ。

「本当に大丈夫？ 俺は呪いなんてバカバカしいと思うタイプだけど……君は、うーん、いかにも幽霊とかを怖がりそうじゃないか？」

「そ、そんなことはありません……っ」

自分が『お子様』だとからかわれているような気がして、つい強がってしまう。

「僕だって、そもそも幽霊がこの世にいるなんて信じていないしっ！ そんな非科学的なものなんて、全然怖くありません……っ！」

一気に言って、ゼイゼイと苦しくなった息を整えた。そんな光を見た男子生徒は、楽しそうにその端整な口の端を上げる。

「そうか。それじゃ、この学園の四十九代目の生徒会長になれって言われたら、なる？」

光は、え、と数秒の間、次の言葉に詰まったあと、ごによごによと口の中で小さく返した。

「それは……な、ならない」

「どうして？」

「怖いから……」

「アハハ、正直だな」

男子生徒が遠慮なく声を上げて笑う。笑顔は快活で明るく、見ていて気持ちがよく、彼の男らしい容姿の爽(さわ)やかさがなおさら際立って見える。

「なんだか、君はすごく可愛い」

頭にポンと手を置かれたかと思うと、広い胸に抱き寄せられてグリグリと強く頭を撫でられる。まるで、ペットの犬猫でも可愛がるような仕草に、光は抗議の声を上げた。

「あっ！ なにするんですかっ」

逃れて身を引いた光の前で、男子生徒は相変わらず微笑んでいた。

「いや、なんか、可愛いなと思って。ところで、君の名前は……？」

「え……」

初対面なのに頭を親しげにグリグリと撫でられたせいで、少しだけ不審を感じて躊躇(ちゅう)躊躇(ちよ)した。だが隠すものでもないと思い、三田光と名乗ると、彼も自己紹介をする。

「俺は東条亮介(とうじょうりょうすけ)。今はこの学園の二年で、四月から三年になる」

四月からよろしく、と言ったあと、亮介と名乗った生徒はにこりと微笑んだ。

「ああ、そうだ。君はたとえこの学園に入学しても、ぜったいに四十九代目の生徒会長

にはなれないから。だから、幽霊に呪われることなんてない、安心して入学すればいいよ」

「え……？」

「今期の……四十九代目の生徒会長は、俺だから」

信じられない言葉に、光は目を瞠(みは)った。

「え……え？ 四十九代目の……生徒会長？ あなたが？」

「そう。去年の十月に就任して、今年の九月末日まで務めることになっている」

「ど、どうして四十九代目の生徒会長になんか、なることに……？」

呆然として問いかけた光の前で、亮介というその生徒は軽く肩を竦(すく)めた。

「立候補したんだ。幽霊なんてこの世にいないし、四十九代目の生徒会長が呪われるなんていうこともありえないと思って。それを、俺が自分で証明してみせようと思って……」

彼は、さらに笑みを深くした。

「それじゃ、四月にまた会えるのを楽しみにしているよ」

グラウンドの方へ去っていく後ろ姿を、光は言葉もなく見送る。

(じゃあ、今の人か四十九代目の生徒会長？ 幽霊に呪われるって言われてるのに、自分から今期の生徒会長になったんだ？ なんか、すごく変わった人~~~~~っ)

自分だったら、ぜったいに四十九代目の生徒会長になんてなりたくない。

そう思って再び祠の方を見た。

本文 p13~21 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>